

「さいたま市幼児教育のあり方検討会議」①

さいたま市幼児教育のあり方検討会議 平成24年9月

はじめに

さいたま市幼児教育のあり方検討会議は、さいたま市における就学前のすべての子どもに対する広い意味での「幼児教育」のあり方について検討し、さいたま市らしい幼児教育の一層の推進を図ることを目的として、昨年7月に設置された。設置者や指導監督権者が異なる園・所・施設の関係者のみならず、関係行政部長が委員となり一堂に会するという、他にあまり例を見ない検討会議となった。さいたま市の「子どもを主人公に」、「すべての子どものために」を共通の視点として、本検討会議では、このように多様な立場・所属のメンバーが今後の幼児教育のあり方について深く議論し、現状を明らかにするためのアンケートを作成して調査を実施し、「提言」としてまとめることができた。さらには、具体的な事業例までも提案できたことは、大きな成果であったといえよう。

さいたま市幼児教育のあり方検討会議 委員一同

Ⅱ 就学前の子どもと子育て・教育・保育をめぐる現状と提言

3 幼児期の教育・保育から小学校教育への円滑な接続と連携の充実

(1) 現状

③小学校・幼稚園・保育所等の活動についての相互理解

最近の保幼小連携研究の実践例には、「子どもの交流」のレベルにとどまらず「保育者と小学校教諭の連携」の重要性を示すものが多くなっている。例えば、園児が「見学」と称して一度だけ小学校の校内を見た経験や、学校行事の際に小学校に行き、お兄さんやお姉さんとゲームに参加した経験は、子どもの小学校への期待をはぐくむことはできるものの、円滑な接続を目指すためには十分とは言えない。「保育者と小学校教諭の連携」の重要な点は、単なる情報交換の面ではなく、それぞれの場での子どもの姿を見ながら、発達や成長のありようを知り、連続することでその姿の変化を学ぶことにある。

今回、調査では連携・接続の取組として保幼小で実際に行われている具体的な内容を記入してもらった。その結果、「保幼小連絡協議会や情報交換会」の開催が169件と最も多く、次いで「小学生が保幼を訪問するなどの取組」が106件にとどまった。この結果から、「会議」としての相互訪問は行われているものの、**保幼小それぞれの教育・保育現場において、教員と保育者が実際に相互に授業や活動を見せ合うなどの実践は十分に行われていない現状が浮かび上がった。**

④連携や円滑な接続に関する小学校教諭と保育者の意識

子どもが自ら段差を乗り越え、小学校生活を楽しく過ごすためには、小学校教諭と保育者間での連携に関する共通した意識は必須と言える。今回の調査では、「連携のあり方」に関する意識について保育者と小学校教諭にたずねたところ、共通して意識されているのは、「情報交換のための会う機会を増やすこと」であった。

一方、保育者の意識として大きかった「幼児が小学校の日常活動に参加する」という**連携の取組については、小学校教諭の意識は非常に低く、関心の相違点が見られた。**

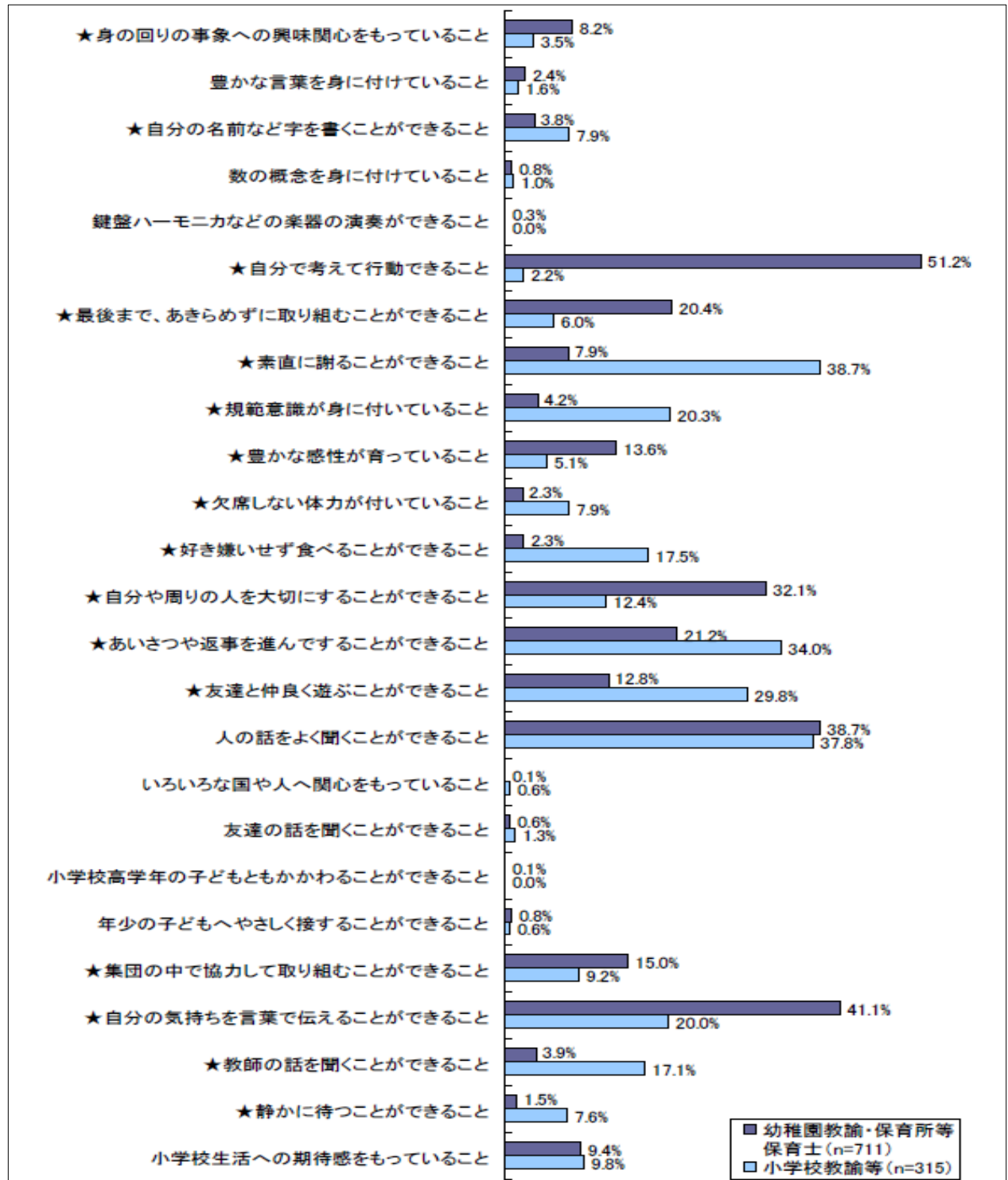
さらに、「入学までに身に付けさせておきたいこと」についてたずねた結果、両者間に差が顕著に見られた項目は【図ー5】に示したように「自分で考えて行動できること」で、約半数の保育者が回答したものの、小学校教諭の回答は2%にとどまった。

一方、「素直に謝ることができること」「規範意識が身に付いていること」「教師の話が聞けること」「好き嫌いせず食べることができる」の項目では、小学校教諭の回答は保育者の回答を大きく上回った。また、「自分や周りの人を大切にすることができること」「自分の気持ちを言葉で伝えることができること」については、保育者の回答に比べ教員では下回っており、**小学校教諭と保育者の接続期の子どもへの意識には、違いがあることが示された。**

「さいたま市幼児教育のあり方検討会議」②

さいたま市幼児教育のあり方検討会議 平成24年9月

図-5 小学校入学までに身に付けさせておきたいこと



資料：「さいたま市幼児教育のあり方に関するアンケート調査報告書」（平成24年3月）より

「幼稚園教諭・保育所等保育士」と「小学校教諭等」との比較

★印は、両者に99%の精度で有意差があることを表す